

資料紹介

上士幌町糠平湖西岸3遺跡採集の土器

An Epi-Jomon Pottery From Nukabirako-seigan 3 Site, kamishihoro Town

北沢 実^{※1}・西澤 千鶴^{※2}

Minoru KITAZAWA and Chizuru NISHIZAWA

はじめに

本稿で紹介する資料は、北海道河東郡上士幌町字糠平4番1に所在する糠平湖西岸3遺跡において、筆者らが平成11年(1999)に採集した続縄文時代の土器である。当該資料は筆者らが復原・図化のために上士幌町教育委員会より借用しており、これらの作業が終了したため採集時の状況等を整理し、ここに紹介するものである。なお、本稿は3を西澤が、それ以外を北沢が執筆した。

1 遺跡の概要

糠平湖西岸3遺跡は、十勝川の支流音更川上流部の右岸段丘上に立地する後期旧石器時代と続縄文時代の遺跡である。現在の糠平湖岸には西岸に6カ所(糠平湖西岸1~6遺跡)、東岸に2カ所(タウシュベツ川遺跡・七の沢遺跡)の埋蔵文化財包蔵地が分布し、細石刃石器群を主体とする後期旧石器時代後半期の遺物が採集される。このうち、七の沢遺跡を除く各遺跡は、昭和30年(1955)に完成した糠平ダムの発電用ダム湖内にあり、渇水期に遺物が露出し湛水期には水面下に没する状況にあるため、表土の流失による包含層の消失が懸念される(図1)。

糠平湖西岸の遺跡群は、ダム建設前の地形図(図2)によると、音更川の右岸段丘を開析するいく筋もの沢によって形成された舌状に張り出す尾根の先端に立地し、黒曜石原産地遺跡として著名な13の沢遺跡は本遺跡の上流約13kmに位置する。本遺跡は東大雪山系のウペパサンケ山(1835m)周辺を源とする五の沢の南側、音更川に向かって張り出した尾根の先端に位置し、標高は500m前後である。



図1 糠平湖岸の遺跡分布
(平成5年発行5万分の1「糠平」を50%縮小)

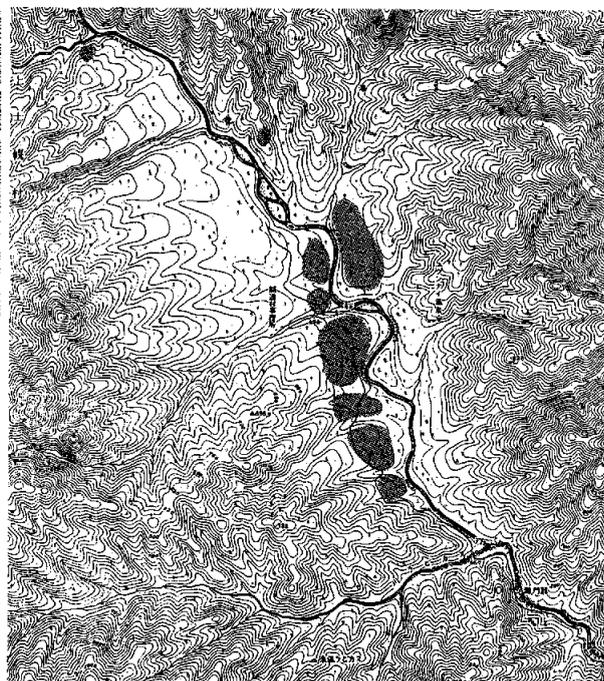


図2 ダム建設前の地形と遺跡分布
(大正6年測量, 昭和22年発行5万分の1「ニベソツ山」を50%縮小)

※1 帯広百年記念館学芸員, ※2 遺跡発掘調査補助員

2 採集の経緯と出土状況

筆者のうち北沢は、平成8年に上土幌町教育委員会が実施した13の沢遺跡の分布調査（北沢，1999）に携わった折に、ひがし大雪博物館学芸員の須田修氏より、糠平湖岸に遺物が散在する地点があるとの情報を得、同氏の同行を得て現地を踏査したところ、後期旧石器時代の遺物が露出した複数の地点を確認し、その後数回にわたり踏査を行った。さらに平成11年に至り、須田氏より土器が露出した地点がある旨の連絡を受け、同年5月24日に現地を訪れ、土器破片が地表に露出した状況を確認した。この地点は湛水期には水没することが明らかなため、遺物が流失する可能性があると判断し、同年5月30日に筆者らが出土状況を記録するとともに遺物を採集した。採集した遺物は、本文で紹介する土器一身体分の破片と、礫5点である。

土器は、北東に向かう緩斜面の南北1.5×東西1mほどの範囲に散在し、そのほぼ中央の0.5m四方に比較的集中して出土した（写真2・3）。この密集範囲の北東側には根跡と思われる落ち込みがあり、遺物はこの落ち込みに流れ込むような出土状況を呈した。包含層は小礫を含む暗黄褐色砂質土で、上位には部分的に給源不明の白色火山灰が観察される黒褐色土が堆積し、下位はシルト質の黄褐色ロームである。なお、出土地点の周辺を精査したが、本資料に関連する遺構・遺物は確認されなかった。

3 土器について

採集資料は土器1個体分であり、口縁部から底部まで半分以上残存し復原に至った（図3・写真1）。

器形は口縁部がやや外反し、口唇から約8cmの位置に最大径をとり、底部付近がややくびれる深鉢形で、口径32.0cm、底径10.5cm、器高は最大で35.4cmを測る。口縁は4ヵ所に突起が作られる。口唇上には刻み目が施され、断面は尖る。底部は揚底である。

文様要素は3～9条のRL帯状縄文、幅約0.6cmの擬縄貼付帯、幅約0.3cmの貼付による微隆起線、三角形列点文である。文様構成は突起のラインを中心にほぼ左右対称であり、横環する擬縄貼付帯により口縁部、胴部、底部に文様帯が区画される。施文順序は直線や曲線を描く帯状縄文が施され、これに微隆起線と列点文が沿わされる。口縁部文様帯では、①口唇直下に横環する擬縄貼付帯、②突起の下にV字状の斜行帯状縄文、③その横に半円形の帯状縄文、④突起より垂下する擬縄貼付

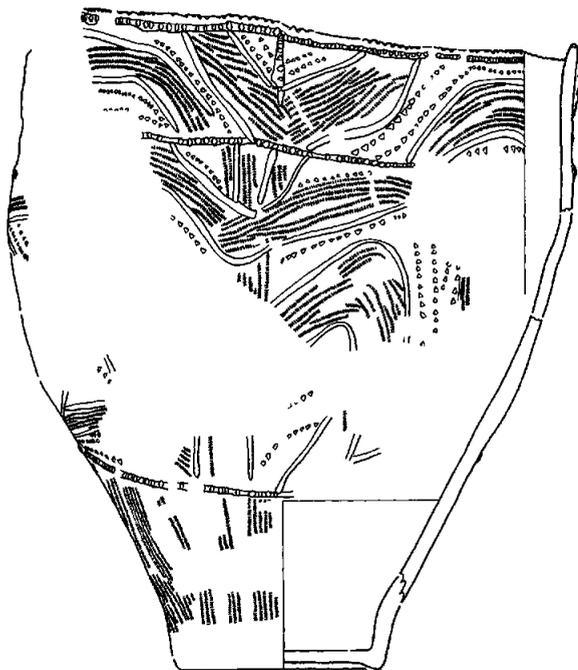


図3 土器実測図（縮尺=1/4）



写真1 復原土器（写真の正面は、実測図の右90度）

帯の順に施文される。胴部文様帯では、中心に縦位に施される帯状縄文が基準となり、胴部上半では①中心でV字状となる横位の帯状縄文、②①の波頂部の下で半円を描く帯状縄文の順に施文される。胴部下半では①中心から左右対称となる楕円、②楕円をつなぐ横位の帯状縄文が施される。底部文様帯では縞縄文が施され、底部下部は横位の帯状縄文や調整が施されるところもある。

胎土は砂をやや多く含み、焼成は良く、硬く締まる。内面はミガキによる横位の調整がほぼ全面に施される。色調は赤褐色から黒褐色である。炭化物は器表面では口縁部と胴部、内面では口縁部の一部に付着する。

本資料の特徴となる文様は、横環する擬縄貼付帯、直線や曲線を描く帯状縄文、これに沿う微隆起線と三角形列点文である。これらの特徴と器形から、本資料は十勝続縄文Ⅱ期（佐藤ほか、1985）のいわゆる後北C₁式に相当し、なかでも新しい段階（大沼、1982）に位置付けられると考えられる。

十勝では後北C₁式の新しい段階の資料は管見の限り出土しておらず、後北C₁式の古い段階のものは浦幌町十勝太若月遺跡（後藤ほか、1975）、池田町十日川5遺跡（道埋文、1993）などから出土する。後続する後北C₂・D式の資料は、上士幌町居辺16遺跡（辻編、1985）、幕別町札内I遺跡（松谷、1985）などから得られている。現在十勝の続縄文時代の遺跡は50ヵ所程度報告されているが断片的なものが多く、本資料は空白部分を埋める良好な資料といえる。

おわりに

本資料紹介に当たり、ひがし大雪博物館の須田修氏には情報提供、現地踏査、資料の借用など多大なご協力をいただいた。また、採集時には大橋毅、大鳥居仁、笹島香織、梶美恵子、山下晴美、梅本陽子の各氏、土器復原にあたっては故・小川壽美雄氏にお世話になったことを記し、謝意を表する。

引用文献

- 大沼忠春（1982）「後北式土器」『縄文土器大成5－続縄文』講談社
 北沢 実（1999）「上士幌町13の沢遺跡の分布調査」『北海道旧石器文化研究』第4号 北海道旧石器文化研究会
 後藤秀彦ほか（1975）『十勝太若月－第三次発掘調査－』浦幌町教育委員会
 佐藤訓敏ほか（1985）「第1節 遺物の分類・編年」『帯広・晩遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告 第1冊
 辻 秀子編（1985）「居辺16遺跡」『居辺遺跡』上士幌町教育委員会
 （財）北海道埋蔵文化財センター（1993）「池田町十日川5遺跡」『芽室町北明1遺跡(2) 音更町西昭和2遺跡 池田町十日川5遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第82集
 松谷純一（1985）『幕別町 札内I遺跡』幕別町教育委員会



写真2 遺跡全景と採集地点（西→）



写真3 土器出土状況